

6. 親しみやすいスケール

< 沖縄らしさの特性 >

● 石灰岩台地の連続する段丘のスケール

沖縄の代表的な内陸の地形は、隆起石灰岩台地の段丘が続く風景である。本島南部や宮古島に見られるこの地形では、段丘と段丘の間の緩斜面がひとつの空間の単位になる。段丘によって遮られ、視界の広がりはこの範囲に限られる。これが、まとまりある景観とスケール感をつくり出す。

● サンゴ礁の海岸、環礁、礁湖のスケール

サンゴ礁のリーフに囲まれた海浜は、ひとつのまとまった領域をつくる。リーフに大きな波頭が砕けるときには、その領域感は一層強調される。ここにも自然に生み出すスケールがある。

● 亜熱帯の植生の持つスケール

沖縄に生育する植物は、亜熱帯の気候の中で非常に急速に成長する。しかし、その成長は主に水平方向への広がりであり、高さは余り大きくはならない。樹木にも沖縄らしいスケール感とプロポーションがある。

● 人間的な尺度を持つ道路や町並み

沖縄の都市の空間には、人をなごませる親しみやすさがある。それは主に古くからの街区やそこに残された昔からの街路に現れている。生活様式が変わってしまった現在も生き続ける道路や町並みの広さと狭さ、変化に富んだ屈曲や不規則さなどが親しみを感じさせる。

● 集落の空間のスケール

農村や漁村の集落空間には、さらに細やかで親密なスケールを持った空間がある。石垣と石垣に挟まれた人がやっと通れる道、ひとつひとつの辻、町角の小さな石取当などに、細やかな心が感じられる。

● 儀礼的空間、公共的空間のスケール

沖縄の伝統的な空間は、グスクや御嶽など、最もシンボリックな場所ですら、親しみやすい人間的なスケールを持っている。

首里城は、全体は大規模なものだが、細かに屈曲するアプローチ空間や建物に囲まれた庭などは、権力の場というよりも、親しみやすい公共空間の雰囲気を持っている。

王家の墓所である玉陵は、墓の石室と前庭はかなり大きなものだが、全体に低く構えられ、またアプローチの空間の秘めやかさ、障壁の低さ、中門の小ささなどには、沖縄の人々の独特のスケール感覚が息づいている。

最も重要な聖地である斎場御嶽も、自然の森の中にひっそりと置かれ、威圧的なところがない。

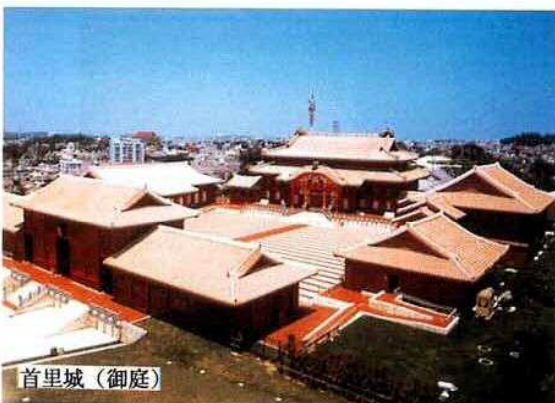
至る所にある小さな御嶽、アサギ、カーなども、荘重な気分を醸しながら、小さくひっそりとしている。



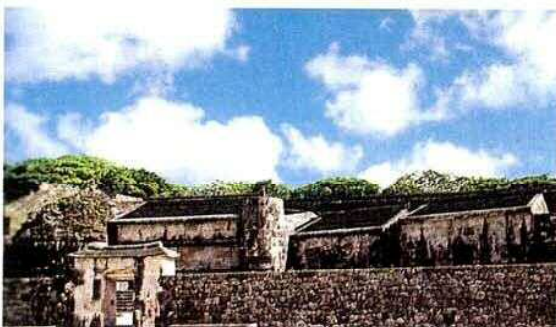
空から見る石灰岩台地



集落の道空間



首里城（御庭）



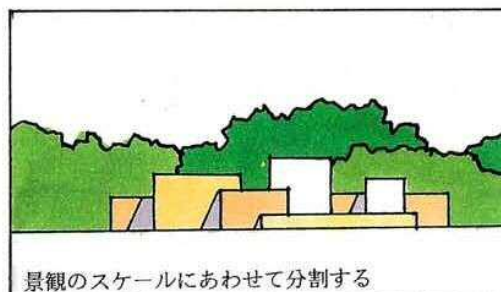
タマウドゥン

(1) 大きすぎるものをつくらない

沖縄の自然のスケール、沖縄の伝統的に受け継がれてきた空間のスケールは、現在も沖縄の景観の基礎をつくりだし、その背景になっている。その優れたまとまりを持ったスケール感を大切に、大きな逸脱や破壊を避けることが大切である。

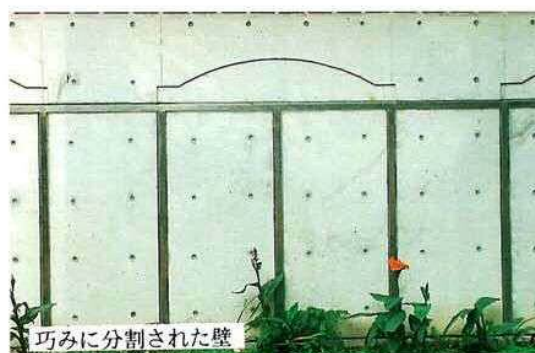
①まとまりあるボリューム

細やかなスケールの景観の中に、大きなスケールの量塊を持ち込むことは、最も違和感を感じさせる。リーフや石灰岩台地のまとまりある景観、市街地や集落の細やかな空間の中に大きな施設を置く場合には、できるだけ地域景観のスケールに見合った、まとまったボリュームに見えるよう、分割と集合のデザインに配慮する。



②分節された面と線

人が大きすぎるボリュームと対面すると、威圧感や圧迫感を感じ、不快な印象を受ける。施設が見られる距離やその見え方に注意し、大きすぎる面や長大すぎる連続が生じないように、部分に分割・分節などすることで、適度なスケール感を与えるように配慮する。



(2) 小さすぎることにはこだわらない

一方、沖縄の造形は、石造の建造物に見られるように、おおらかなスケールと単純で明瞭なシルエットを特徴とする。沖縄の風土の中では、ディテール(細部)にこだわるよりも、全体のかたちの美しさやまとまりをつくることが大切である。

①全体のかたちをデザインする

沖縄らしいデザインのためには、ディテールよりも全体のかたちのまとまりを創り出すことが大切である。小さな部分から考えて、その寄せ集めでつくと、細かすぎるものになりがちである。まずディテールにこだわらず、大きな構えをデザインする。



②構造の美しさを活かして

土木施設では、施設を構成する主要な構造物の構造形式そのものを美しく、沖縄らしいものにするのが重要である。石造建造物の姿やプロポーション(均整)を参考に、沖縄らしい美しい構造をつくることを考える。

7. 見通しと突き当たり



沖縄の夕日



島への視線

<沖縄らしさの特性>

●太陽の方位と見通し

沖縄の伝統的な信仰は太陽と深く結びついている。太陽を見ることは暦を知る上でも重要であった。沖縄の各地に、日の出や日没の方位を観測するための場所がある。そこでは夏至や冬至の太陽の方向が重視されている。

日の出や日の入りを見ることは、太陽の運行を感じることであり、環境に敏感であることの基本である。また水平線に昇り沈む太陽は、遠い国への想像力をかき立てるものでもある。

●島への視線

沖縄では、太陽と並んで、近くに見える島への見通しも重視された。斎場御嶽から久高島への視線はそのままニライカナイへ通じている。このような信仰の意味を抜きにしても、島の見え方で大気の状態がわかり、自分を取り巻く環境に意識的になる。太陽や島の他、山や重要な建物など、ランドマークに向かう視線を大切にすることは沖縄の景観づくりでは特に重要である。

●お通し

沖縄には「お通し」という考えがある。これは、実際には見えていないけれども、大切な場所（御嶽など）がある方角を向いてお祈りをする、またそのようなお祈りをする「遙拝所」のことである。実際の景観には見えないものを、その方角に感じることで、見えないものも景観に取り込むことができる。

●空間を秩序づける

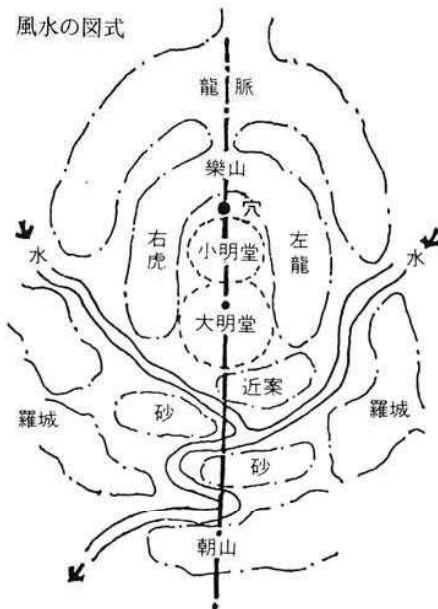
近代の発想では、空間はどの方向にも均質に広がり、どの場所も同じという考え方がある。しかし、伝統的な発想では、大切な場所や大切な方位を決めて、空間を秩序づけていた。そのことによって人は安心してこの場所に定位することができる。

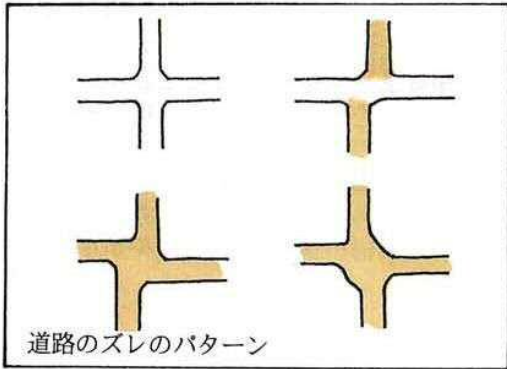
●風水という考え方

沖縄には中国や朝鮮から持ち込まれた「風水（フンシー）」という考え方があり、今も墓や家をつくる際には使用されることがある。

「風水」の発想では、自然の空間には「気」の流れがあり、そのエネルギーをうまく流したり滞らせたりすることで良運をつかもうと考える。そのために、太陽に向かう方位が良いとされ、背後を山や森に囲まれて前は大きく広がる場所がよい、などとされる。ここでは太陽・風・山・森・川などさまざまな自然物が参照される。

風水の図式





道路のズレのパターン

●風水の応用

昔の沖縄の人々は、風水の考え方を当てはめることで、不規則な自然の地形・景観の中に秩序を見出してきた。それが墓の構え、屋敷の配置、集落の立地、玉陵や首里城の構えにも応用されている。

●格子状の集落構成とその破調

風水の導入にともなって、18世紀の沖縄では集落の再編成が大規模に行われた。「気」をうまく流すという論理で格子状の整然とした集落がつくられたが、格子状集落にもさまざまな破調が見られる。そうした破調の典型が、交差点に現れた「突き当たり」「くいちがい」である。

●「突き当たり」と「くいちがい」

格子状を基本にしながらも、通りを途中で止めて三叉路にしたり、交差点で道を少しずらせて、見通しが利かないようにしたりしている。

景観的に見ると、このような工夫が集落や市街地の空間と景観の親密なまとまりを創り出している。突き当たりで区切られた街路は、ひとつの独立した領域を創り出し、景観に適度なスケール感を与える。

●石敢當とヒンプン

このような三叉路や、食い違いでできた突き当たりには、よく「石敢當（イシガントウ）」が置かれている。石敢當の機能は「通りをやってくる悪鬼が横にそれるように」といわれる。沖縄の人々はこのようにして、直線的に通ってくるものを避けようとする。

同様の発想が、屋敷の入口の「ヒンプン」に見られる。ヒンプンは通りから屋敷が直接見えないようにする衝立（ついたて）である。

このように、沖縄の人々は、大きな自然の中では直線的な見通しを好み、身近な生活空間では親密なまとまりを好んでいる。



石敢當



ヒンプン

(1) 見通しをデザインする

景観づくりでは、景観のまとまりを創り出すこと、景観のつながりや広がりやを創り出すことがともに重要である。「見通し」の景観は、広がりをつながりをつくる。沖縄では大きな自然景観の広がりや、大切な場所を結ぶ景観の連なりを創り出すよう配慮する。

①自然への広がり

太陽（日の出、日没）や島影など、自然の特徴的な要素を見つけて、それへの視線を確保する。日の出や夕日の見える海岸や高台では、公共的な場所からこれが見渡せるように、また、その方位を特に強調した展望施設づくりなどを検討する。



見晴らしを活かす

②大通りを見通す

都市や市街地の大きな通りや、地域の大切な道路では、交通の円滑な流動を確保しつつ、できるだけ地域や町並みの姿が大きく捉えられるよう、直線的な見通しを創り出す。都市では街路の格や沿道の町並みの質を考慮して、余り視線を絞らず、広がりも感じられるように配慮する。一般の市街地や集落地域では、散漫な印象とならないように、並木などで視線を絞り、道路に沿った軸線と見通しを強調する。

③見通しとアイストップ

見通しの先に何か目標物があると、見通し景観の印象は一層鮮烈になる。地域の大切な場所、建物、大きな木や森、モニュメント（記念碑など）が正面に見える通りは明瞭なイメージを持ったものになる。また、沖縄の場合には、海に向かって大きく開くこと（虚のアイストップ）も地域の特徴をあらわす大切な手法である。せっかくの海への見通しを妨げることをないように注意する。



(2) 突き当たりをデザインする

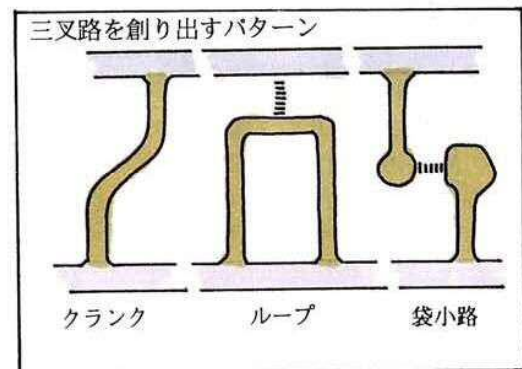
沖縄の集落や古い市街地に見られる親密な空間では、景観のルーズな広がりを避けて、突き当たりをつくり、景観のまとまりを創り出す傾向がある。こうした特性を持った市街地や集落、また、新しい住宅地などの空間では、親密な景観を創り出すために、三叉路などの活用を検討する。

①三叉路システムを活かす

現在すでに三叉路やくいちがい街路のネットワークが機能している地域では、これを大切に活かすよう配慮する。自動車交通の利便を高めるために新しい道路などを導入する際にも、地域の特徴ある佇まいを宿す既存の三叉路はできるだけ壊さないように配慮する。

②三叉路を創り出す

土地区画整理事業などで新しく道路ネットワークを計画する際には、区画街路や歩行者ネットワークのレベルで、まとまりある親しみやすい町並み景観をつくる工夫として、三叉路を検討してみる。



8. 柔らかな境界



緑に包まれた屋根



緑に包まれた手すり



バルコニの緑

< 沖縄らしさの特性 >

● 柔らかく包み込む緑

沖縄の自然は豊かな緑の繁茂を促す。特に沖縄の草は、冬枯れすることがないため、旺盛に土を覆い、石垣や建物の壁にも這いあがって行く。言い換えれば、沖縄で裸地がそのまま残っていることはあまり自然な感じがしない。農地ですら、キビ畑は背丈の高いサトウキビに覆われて一面の緑に見える。

沖縄の緑は、土を覆い尽くして、人工物の上にも覆い被さり、人工物は自然に柔らかく包み込まれる。

● おおらかな気質

沖縄の人々はおおらかな気質を持っている。そのおおらかさは、私的空間と公共空間の境目に良く現れている。屋敷の門は開かれ、窓は大きくあけられて、家の中の気配が通りでも感じられる。商店の入り口は開け放たれ、商品が道にまではみ出していることも少なくない。そして、涼しい木陰などでゆったりと時を過ごすことが大好きである。

こうした気質を大切にするには、そこに現れている空間の秩序、特に境界の曖昧さや柔らかさに着目することが必要である。

● 見えない秩序を重んじる

融通無碍なあいまいさやおおらかさの一方で、沖縄の集落には目に見えない秩序がある。それは集落の経歴を表したもので、御嶽や始祖の家（ネヤ）を頂点とし、分家の家、古くからの家、新しく移ってきた家などが一定の秩序を持って配置されている。

沖縄の空間には、こうした目に見えない秩序がいくつも潜んでいる。

(1) 緑に包まれた柔らかな境界

沖縄の景観は、自然の緑が下地となって、その中に人工物が置かれている状態を基本としている。人工物がつくる硬い境界を目立たせることなく、豊かな緑でその境界付近を覆い、柔らかく眼にやさしい境界領域をデザインする。

① 地面を緑で覆う

施設が置かれる下地である地面を、可能な限り緑で覆うよう努める。裸地を残さないように気を付け、植物が施設と地面の境目を曖昧にするほど成長するよう育てる。



緑に縁取られた道

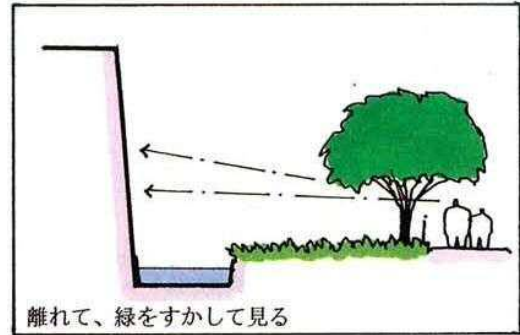
②空を覆う緑をつくる

大規模で単調な形態の施設は、周辺の景観との違和感を軽減するように、大きな緑で覆う。施設そのものを覆うことが難しい場合には、施設を見る位置をやや離して、その場所を樹林や並木で覆い、木の間越しに見るように工夫する。

③施設の姿を緑で包む

施設の姿が幾何学的で鋭角的な厳しいかたちの場合には、景観をやわらげるために、施設そのものを緑で覆うことを検討する。

施設を緑で覆う場合には、壁面をツタなどで面的に覆う手法の他、手すりやパラペットから緑をたらしたり、柱や格子などにツル性の植物を絡ませるなど、線的に緑を配して、角張った印象をやわらげる。



(2) 相互に浸透するあいまいな領域

近代的な発想は、領域を明確に区分する。しかし、沖縄の人々のおおらかな気質からは、そうした明確な区分は時として不適切な場合がある。機能の発揮や安全の確保のために領域を区分することは必要である。しかし、その区分の仕方は、できるだけ柔らかに、やさしく、できればあいまいな部分を残すように配慮する。

①物理的な障害物を少なく

転落や交通事故などの安全上の支障がない限り、高い壁や段差などの物理的な障害はできるだけ設けないように配慮する。

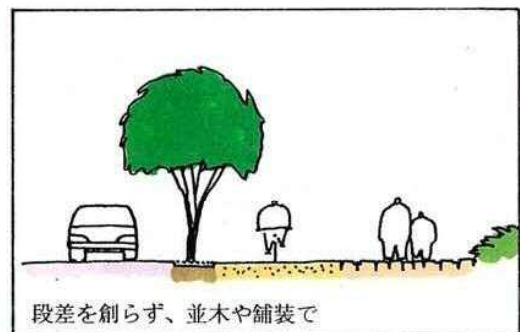
障壁などを設ける場合には、できるだけ透視できるものや低いものなど、向こう側の様子が感じられるものとするよう検討する。



②障壁を設けずに領域を示す

障壁を設ける必要のない場合でも、場所や領域の意味を明示することが、景観を明瞭でメリハリのあるものにする場合がある。

その場合は、舗装材、舗装のパターン、並木や列柱などを用いて、領域の相違と区別を示すことを検討する。



9. あざやかな色彩



ビンガタの黄色

<沖縄らしさの特性>

●明るく澄んだ光

本県の景観はあざやかな色彩にあふれている。この色彩は、沖縄を包む強く明るい日差しに照らされることで際立つ。明るく澄んだ光は、色彩を鮮明に発色させ、光と陰のコントラストは、光に照らされた色彩を一層鮮やかに引き立てる。

●花の色彩

自然の色彩を代表するのが、亜熱帯の風土に咲く花である。

アカバナ、デイゴ、ブーゲンビリアなど、彩度の高い、原色に近い色の花たちが咲く沖縄は、鮮烈な色彩にあふれている。

沖縄の花の色は、濁りが少なく、しかも明度の点では温帯や亜寒帯（日本本土）の花よりも低いために、明るい光の中で一層際立つ。さらに、基調色でもある琉球石灰岩の白～淡褐色や都市に多く見られる白～灰色の建物、集落の基調色である灰色～褐色、そして、植物の濃く深い緑に対して、いずれも強い対比を持つために、一層鮮やかに感じられる。

●染織の色彩

文化が育んだ色も、基調色と花の色の対比をそのままに映しているようである。ヤチムン（陶器）や紬、芭蕉布などに見られるくすんだ色合いや濃い緑は、沖縄の基調色を反映している。

これに対して、紅型に見られる赤や黄の原色の地色は、花の色を写している。

●生活の中のさまざまな色彩

景観の中でも、色彩の対比、基調色とアクセントカラーの対比が見られる。

市場では、コンクリートや金属のくすんだ色、白を基調とした人々の服装の色、褐色に焼けた肌の色に混じって、野菜や果物、サンゴの海の魚たちが際立った色彩の対比を見せている。

都市の空間では、コンクリートやアスファルトの淡灰色～濃灰色、建物に多い白～淡褐色に対して、自動車や広告などが原色の鮮やかな色を主張している。

集落では、周辺に広がる森や農地の緑の中に、コンクリートや石灰岩、木材などのくすんだ色が基調となって、生け垣の緑や赤瓦の色、そして咲き乱れる花の色が渾然となっている。



市場の赤



都市の色



祭りの色（竹富島）

(1) 景観の基調になる色彩

色彩景観を考える上では、まず、景観の基調になる色を整えることが大切である。それぞれの環境の中で基調になっている色を見つけ、これを基本に基調色の統一を図る。

① 琉球石灰岩の色

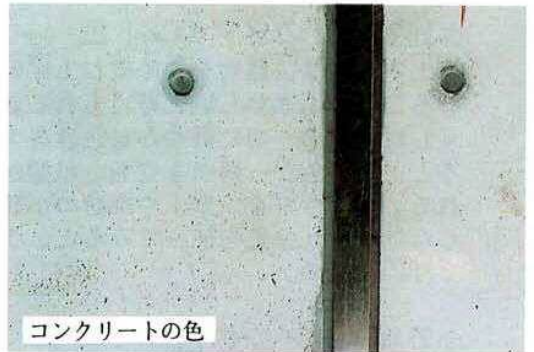
沖縄の生活空間を創り出す重要な要素である石垣や壁をつくっている琉球石灰岩の色を基調色のひとつとして重視する。特に、伝統的な集落や古い市街地では、歴史的な景観の保全も念頭に入れ、この色を基調色として活かす。ただし、石灰岩は切り出した当初の明るい色から次第にくすんだ灰褐色に変化する。この変化を見越して周囲の色を決める。



② コンクリートの色

戦後、沖縄の都市はコンクリートを主要な素材として形成されてきた。コンクリートはすでに沖縄の基調色になっている。

塗料の劣化が速い沖縄では、コンクリートの地肌の色をそのまま見せている建物も少なくない。打ち放しのコンクリートやコンクリートブロックの色が基調になっている地域では、これを基調色として色彩計画に活かす。



③ タイルやペイントの色

沖縄には、コンクリート建物がタイルの外装で施されているもの、また、ペイントで塗られているものも多くある。これらの中では白～淡褐色を用いているものが比較的多い。地域によっては淡青色や淡緑色、黄色や褐色の勝ったところもある。これらの外装色もできるだけ色系をそろえ、濃淡のバリエーションを加えて、統一感の中にも変化に富んだ基調色として活かす。



④ 植物の緑色

沖縄の最も重要な基調色は、植物の濃く深い緑の色である。緑の色は、落ちつきといきいきしたイメージを同時に兼ね備えた、他には代え難い特徴を持っている。都市や集落の人工物が創り出す基調色は概ね白～灰・褐色など彩度の低い色彩だが、ここに緑が加わることで、基調色にも沖縄らしい、いきいきとした活力が感じられるようになる。色彩景観のためにも、積極的に緑化を進める。

